

二〇一四年二月一八日(参加者一四名)

せせらぎの道を辿りて梅探る	菜々
百千鳥子安地藏にぬかづけば	"
供養待つ人形たちへ涅槃雪	"
扁額は空海の書や風光る	"
荒東風に藪騒がしき男坂	"
一山に札所めぐりや梅日和	"
老幹の瘤隆々と梅つぼむ	せいじ
城濠の底見えてあし下萌ゆる	"
白梅といへと仄かに罅紅し	"
空濠の底を縁どる黄水仙	"
擬宝珠に落しものなる冬帽子	ひかり
店々に湯気立て競ふ中華街	"
観音のそびらの藪に笹子鳴く	"
獅子も膝折りて嘆くや涅槃絵図	"
梅林の蒼蒼を存問す	わかば
風音に混じり笹鳴届くなり	"
うす暗き石窟の中冴返る	"
陋巷の東風に高舞ふ芥かな	有香

手作りの雛それぞれに個性あり	"
下萌やおもちゃのスコップ並びある	"
弱き足励ましつつや梅探る	つくし
マフラーを取りて香煙まとひけり	"
玉砂利を鳴かせなかせて青き踏む	こすもす
幼な子のとぶやうにくる雪間道	"
灯を消しておやすみなさいお雛さま	小袖
探梅の城址に遠く海光る	"
梅東風にうなだれ登る男坂	はく子
詣で道右に左に冬菜畑	"
春光に輝く九輪仰ぎけり	宏虎
道の辺の藪へ消えたる遍路あり	ぼんこ
春寒し延命根に触れしより	満天

定例句会みの選

二〇一四年二月一八日(参加者一四名)